

5月 2021

専門特化医療に振り回される老病人

目と鼻が異常に乾燥し始めてから早や1年余、いまもって日夜、四六時中、悩まされ、苦しめられている。症状は重くなったり軽くなったりと波があるものの、全体として悪化の方向に向かっているようだ。

1. 医療の専門特化

医者には、もちろん診てもらった。目の乾きが特にひどく、ゴミが入っているような違和感や痛みを感じ、視野がぼけ見えにくくなったときは、眼科へ。担当医は、最新機器を駆使し様々な検査をしてくれたが、結果は「目には特に異常なし」、「ドライ・アイではない」であった。本人がひどい症状を訴えているのに「異常なし」とは、まか不思議。また、目と同時に鼻も乾くと訴えると、鼻は専門外とのこと。仕方なく、市販の点眼用人工涙液を使用し誤魔化している。

また、鼻の方が異常に乾き、ヒリヒリ痛み出血さえた時は、耳鼻科で診てもらった。担当医は、最新CTスキャナー(たぶん?)で鼻の部分の頭部断層連続画像を撮影し、それを見せながら「特に異常なし」と説明してくれた。鼻の中(鼻腔)を直接見ての診察は、ほんの数秒(と感じた)。また、鼻と同時に目も乾くが関係しているのではないかと尋ねると、「関係ない」と即断。本人は現に「目鼻の乾き」で苦しんでいるのに、まったくもって不可解。仕方なく、鼻についても、市販の点鼻液スプレーで、その場しのぎをしている。

眼科は目だけ、耳鼻科は耳鼻だけの高度専門化が、地域医療でも進んでいるようだ。

2. 医者巡りの右往左往

とはいえ、目鼻の乾きは苦しく、日常生活もままならない。そこでネット情報をあさり、目鼻そのものというよりは、もっと根本的な何らかのアレルギーか、いやそれとも「シェーグレン症候群」とかいう難病ではないかと疑い、内科で関係しそうな多項目の血液検査をしてもらった。ところが、幸か不幸か、これらの血液検査でも特に異常は無し。

であれば、虫歯か? 全く痛みはないが、上あごの最奥に乳歯が1本残っていて、これが虫歯になっていた。位置的には鼻腔にごく近い。ひょっとしてこの虫歯から何らかの感染が鼻腔に及んでいるのではないかと疑い、いずれ治療しなければならぬこともあって、歯科で抜歯治療してもらった。抜歯後、患部に殺菌液をつけてもらい、数日、感染防止薬を服用すると、目鼻の乾きが幾分おさまり始めたような感じがした。が、喜びもつかの間、1週間もすると目鼻は元の乾燥状態に戻ってしまった。虫歯抜歯でもダメ。もうお手上げ。

むろん、人間の心身は複雑であり、原因不明の病気があっても何ら不思議ではない。私の目鼻の乾きの原因が判然としないのも、現状ではやむをえないだろう。苦しいが、当面は、医者巡りを続けつつ、様子を見るしか仕方あるまい。

3. 医療の「専門たこつぼ化」

しかし、そう諦めてはみたものの、この1年あまり、あれこれ診察を受けてみて、全くの素人ながら疑問に感じざるを得ないようなこともあった。近年の医療のハイテク高度化、専門特化の進行が、地域医療現場の医者をして、診察すべき病気を生身の患者の訴える病気として総合的に見ることを妨げている場合が少なくないのではないかという疑問、いわば医療の「専門たこつぼ化」への危惧だ。(先端医療の高度専門化は当然。問題は、役割分担を考慮せず、地域医療現場まで過度に専門特化し、専門医がバラバラで競合しあい、患者の医療情報ですら積極的に共有しようとしていないように思われること。)

最近の地域医療現場の医者は、忙しいこともあってか、患者の訴えを丁寧に聴くことをせず、自分の専門分野内の検査の数値や画像だけを見せ、それで診断して、よしとする傾向がある。総合的に病気を診て診断しようとしなから、自分の専門分野内の検査で異常がなければ、それでおしまい。それ以外には別の医者に診てもらえ、ということになる。

が、もし医療がこのような「専門たこつぼ化」した診察でよいのであれば、生身の医者よりもAIによる診断の方が迅速正確で安上がりということになる。そうなれば、医者は、不眠不休で働く超高性能の「AIロボット医師」に取って代わられてしまうことになるであろう。

4. 医療の原点としての総合医

以前には、地域社会のお医者さんの多くは、高度に専門特化した専門医ではなかった。近くのお医者さんに行くと、内科的病気はむろんのことケガであっても、とりあえずは診て手当をしてくれた。私も子供の頃、持病の扁桃炎や手足のケガなどで、「先生(村のお医者さん)」に時折お世話になった。僻地の小村だったから、そうせざるをえなかったのだろうが、いま振り返ると、そうした医者のあり方には、単に「そうせざるをえなかった」というにとどまらない、より根源的な医療の原点としての意義があったように思われる。高度な検査機器は何一つない質素な医院だったが、「先生」は診察を受けにきた村人の訴えに耳を傾け、じっくり問診してくれていた。

今日においても、身近な地域のお医者さんには、専門特化ばかりを競うのではなく、訪れた患者の訴えにまずは耳を傾け、様々な病気の可能性を考え、総合的な観点から診察してくれる「総合医(総合診療医)」であってほしい。そうした「総合医」こそが、私たちの「かかりつけ医」には望ましいのではないだろうか。

【参照】

(1)英国「総合医療 General Practice」([It's Your Practice: A patient guide to GP services](#))



- The role of a GP
- Some other key roles explained
- GP services
- The differences between countries

(2)「[総合診療医養成へ拠点 地方5大学前後 不足解消狙う 厚労省](#)」毎日新聞 2020/2/3

(3)厚生労働省「[総合的な診療能力を持つ医師養成の推進事業 実施要綱\(案\)](#)」

谷川昌幸(C)

Written by Tanigawa [編集](#)

2021/05/27 at 19:08

カテゴリー: [健康](#), [情報 IT](#)

Tagged with [AI 診療](#), [かかりつけ医](#), [総合診療医](#), [総合医](#)